

# 松波むかし語り ここに住み続けて

その53

今回のお客様

教師ひとすじに生きてこられた

なかだい ただし

中台 正さん 83歳 2丁目

“ながく教職にありましたが、教師をやって良かったと思っています。”



「中台さん」とお呼びしようとしたら、なんと私の高校当時の母校の数学の先生でした。お許しを願って、これまでのこのシリーズ同様、「中台さん」と呼ばせていただきますが、中台さんは昭和6年、船橋の薬園台の商家に生まれました。「小学生の時分は、先生が宿直の時、子どもたちを集めて課外授業をしてくれたり、学校にはその当時、木剣がたくさんありましたから、みんなでチャンバラをしたりしました」。昭和20年3月の東京大空襲の際は、帰るアメリカの飛行機が置き土産に焼夷弾を落とし、うち3発が自宅に当たるなど被害も受けました。

軍人だった叔父さんに子どもがなかったことから、4人の男兄弟のうち、末っ子の中台さんが中台家を継ぐことになりました。「中台の父は普段でも羽織袴を着けているような人で、厳格な人でしたね。当時、中台の父は千葉中学、今の千葉高の配属将校で、書道も教えていました」。そのお父さんもまたお母さんも、ともに102歳まで天寿を全うしました。

それがどうして数学の先生に？とお聞きすると、「数学は好きでしたね。地面に図形を描いて、兄が三角関数を教えてくれたこともありました」。数学が情けないほど苦手だった人間からすると、どうも別世界の方のように思えるのですが、それはまあ置くとしましょう。中台さんは東京理科大に進みました。「私の時代は英語は“敵国語”とされていましたから、ほとんど勉強しなかったのが、大学に行ったら即、ファラデーの『ロウソクの科学』を原文で読め、ですからね。英語では苦勞しました」。昭和30年、都内の田無中学の数学の教師になります。「昔は宿直制度がありましてね。夜、懐中電灯をたよりに校内を回るんですが、理科室の人体模型などは気持ちのいいものじゃなかったですね。それに、小使いさんが夕食を作ってくれるのはいいのですが、呑んだ先生がしばしば『学校に泊めろ』と言ってきて、狭い宿直室にいっしょに寝泊まりしたりしましてね。にぎやかなものでした」。なんだか『坊ちゃん』の世界のようで、楽しくなります。



二和高校 校長室

その後、江戸川区の松江三中から昭和40年、千葉の木更津高校、45年にこの近くの千葉東高校、それから野田の清水高校と市立千葉高校で教頭を務め、船橋二和高校の初代校長を最後に高校を退きました。「二和高校が演劇で全国優勝したことなど、さまざまな思い出があります」。この間、数学の内容も変わりましたか？「時代とともに、数学の内容も変化しているようです」。お父さまもそうですが、ご兄弟も書をされる一家で、お話をうかがった部屋はぐると書に囲まれています。ご自身も石に彫る篆刻(てんこく)をなさるとか。

「ほかの仕事を知りませんが、教師をやって良かったです」というのがお話のしめくりでした。「田無中のときは、生徒と一緒に高尾山から相模湖あたりまで旅行したりもしました」。生徒たちとの交流ができたこと、そのことが「教師をやって良かった」につながっているように感じました。